

氏 名 つばき た たか し
 椿 田 貴 史
 学位(専攻分野) 博士 (人間・環境学)
 学位記番号 人 博 第 270 号
 学位授与の日付 平成 17 年 3 月 23 日
 学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
 研究科・専攻 人間・環境学研究科人間・環境学専攻
 学位論文題目 人間形成における象徴の意義
 ——フロイトに始まる象徴論の展開——

論文調査委員 (主 査)
 教授 新宮 一成 教授 鯨岡 峻 教授 道旗 泰三

論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文は、フロイトに始まる精神分析の象徴概念を検討することによって、人間形成にとって象徴が持っている機能の意義を検討したものである。

第 1 章および第 2 章では、フロイトの『失語論』において提示された象徴概念と、そこで示された言語論が、後の精神分析の実践とどのように関係しているのかを中心に考察がなされている。フロイトは『失語論』において、自発的発話を説明するための心理学的図式を提示し、表象同士の連合関係によって話が成立するとした。そして、表象を閉ざされた語表象の群と開かれた対象表象の群にわけ、両者の結びつきを象徴と定義した。本論文は、自発話のための心理学的図式および象徴概念が、後の『ヒステリー研究』でのヒステリーの話の分析にどのように結びつけられるのかを検討している。すなわち、ヒステリーにおいては、対象表象に相当する外傷的体験の記憶やそれに伴う表象について自分から話すこと、表現することができない。したがって、ここには、語表象と対象表象との分裂がある。本論文は、フロイトはこのような分断され、断片化されて残された表象、表現、症状に象徴という言葉を用いるようになったという点を指摘している。さらに、『失語論』の発話に関する心理学的図式では、抑圧や表象に関わる力動的側面、さらには他者と向き合う主体という概念があまり考慮されていないため、ヒステリーなどに特有の心的機制を考察することができない、ということも指摘している。また、ヒステリーの象徴については、患者がそれによって言語表現の基盤となっている身体感覚を生き直しており、その表現の形式には普遍性・共同性がある、という点が考察されている。この問題はヒステリーの象徴的表現の背後には葛藤や抑圧がある、とする観点と併せて、フロイトの精神分析における象徴概念の基本的な特性とされ、『失語論』から精神分析への展開を明らかにしている。さらに、このようなフロイト的象徴概念の特質が、当時支配的であった象徴主義における象徴的表現と対比的に論じられ、後者は未来において諸言語の統合が達成される、という観点があるのに対し、フロイトは時代に逆らって、過去において決定的な出来事が既に生じている、という発想で象徴を捉えていることをも指摘している。

第 3 章においては、象徴とオカルティズムとの関連が考察される。象徴が個人を超えたところから個人の表現手段に制約を加える、という臨床的な事実は、時として個人に不気味な印象を与える。そして、象徴の背後にある抑圧された観念内容を「知り得ないもの」と措定することによって、神秘主義的な象徴解釈がなされるようになる。本論文では、そうした象徴解釈の事例としてユングの共時性の概念をフロイトのテレパシーに関する解釈と対比的に論じている。この対比によって、フロイトが象徴をそれ自体として分析されるべき対象として、構造的に捉える視点を設定したということを明らかにしている。

第 4 章では、フロイトの象徴論や理論をロマン主義的なものと見なすエレンベルガーの見解を批判的に検討し、むしろ、フロイトの自己分析の動機や展開のうちに、精神分析におけるロマン主義的ではない要素である、デカルト的とも言えるような自己関係的な構造を析出している。すなわち、フロイトが精神分析を創始するにあたり、自らの幼児期の記憶について探求することで、エディプス・コンプレックス、抵抗などの概念が明確になった。このような概念は、自己が自己を認識し

ようとする困難な構造そのものに即して析出されている、という解釈がなされている。これらの精神分析理論の検討により、フロイト理論の思想史的な位置づけをロマン主義よりも、デカルトに始まる認識する自我の伝統に位置づけ、フロイトが、象徴という概念についても、その論理的な構造を捉え始めたことを明確化している。

このようにして形成されてきたフロイトの象徴概念が、フロイト以後の精神分析の実践においてどのように展開されるのかを考察するのが本論文の第5章から第8章である。

メラニー・クラインは、フロイトの精神分析理論の実践的視点を幼児の分析にまで拡大し、遊びの言語的解釈を通じた児童分析を行った。特に重視されるのは、クラインが1930年に発表した、早期統合失調症が強く疑われるディックの症例である。本論文は、象徴を形成することが治癒へつながるというテーゼがクライン学派の精神分析の実践において重要な治療方針として位置づけられていることを明確化し、クラインにおいては十分に概念化されていない父の象徴が、人間の精神構造の変容に関わるということ、第6章において、ラカンの父のシニフィアンについての理論の中で示す。父の象徴の成立は父殺しというエディプス・コンプレックスを通じて可能になる。人はエディプスの葛藤を通じて象徴としての父と出会い、自らの存在を象徴的な水準から認識して自己形成するという、人間形成における象徴論の骨格が示され、この骨格の例証が第7章と第8章において、幼児の遊びの分析事例やフロイトやラカンによって検討された「シュレーバー症例」に基づいて行われ、精神分析での、象徴機能を軸にした治療的方向性が提示される。

論文審査の結果の要旨

精神分析のみならず、精神療法全般において、象徴という概念はさまざまな意味合いで使用されているにも関わらず、この概念の意味は曖昧さに包まれている。したがって、この概念を臨床的にも理論的にも有効な仕方と定義づけることは非常に重要な課題となっているが、思想史の中での象徴概念の拡散に伴い、この作業は極めて困難になってきていた。本学位申請論文は、このような基礎的な課題に対し、単なる操作的な定義を下すことで問題を解決するのではなく、この概念が精神療法の歴史上最も豊かに用いられた時代に立ち返りつつ、その文化的背景を含めた概念史に基づいて考察をしている点において、大きな意義が認められる。

本論文は、象徴が人間の精神形成にどのような影響を及ぼすのかを、精神分析の立場から検討している。第1章と第2章においては、フロイトの『失語論』とヒステリー理論を関連させながら、精神分析の設立と共に、象徴概念の本質がフロイトにおいて理論的な変容を遂げたことをはっきりと指摘し、共同体と個的身体の象徴的関係の重要性を際立たせている。こうした象徴概念の転換については、これまでの『失語論』に関する研究ではほとんど指摘されておらず、今後の研究に新たなテキスト解釈の方向性を示すものとして大いに評価されて良い。

第2章の後半と第3章では、象徴主義芸術における象徴概念とフロイトの象徴概念が、未来志向の象徴主義と、過去の外傷理論を基礎としたフロイトの象徴論という対比によって説明されている。フロイトが生きた時代に隆盛を誇っていた象徴論を背景としてフロイトの象徴概念の特徴が浮き彫りにされる。これに関連して、第4章においては、ロマン主義とフロイトとの関係が検討されている。エレンベルガーは、フロイトをロマン主義的精神の持ち主であるとし、その理論はロマン主義的精神医学であるとした。しかし、申請者は、こうした見解に一定の理解を示しつつも、フロイト理論においては、ロマン主義の心情を動機づけている、故郷への回帰というテーマが、「不気味なもの」あるいは自体愛的状況として分析されているという点に着目し、フロイトにおける反ロマン主義的な傾向をはっきりと取り出している。さらに、自己の魂の遍歴ないし失われた自己の探求という、エレンベルガーの指摘するロマン主義的なモチーフそのものに関して理論的な検討を施し、フロイトの自己分析は、自己認識において生じる自己言及的な問題を自覚している点で、自己の思考内容の真実性を容易には認めない近代の哲学的伝統に連なっていることを指摘している。こうして本論文は、フロイトの思想史的な位置づけに、これまでの一般の見解とは異なった斬新な視点をもたらしている。

第5章においては、フロイト以後の精神分析の実践における、象徴概念の展開を検討している。まずは、メラニー・クラインによる精神病の子どもに対する精神分析治療が、治療者による対象と象徴の導入という観点から考察されている。自我が非常に脆弱であり、世界に対する関心を失っているかに見える子どもの治療においては、治療者が子どもに対して象徴を導入することで、子ども自身が象徴化の主体になるとされている。申請者はこの技法が後のビオンやシーガルといったクラ

イン学派の分析家たちの理論的な支柱となり、「象徴形成が精神病理の治癒につながる」という基本的な治療観が形成されていった経緯を通史的に説明する。このテーゼは、精神分析が、困難とされる精神病圏の精神療法にも積極的に取り組むことを可能にした重要な治療観であるが、これまでその根拠が、過去の治療者たちの治療実績によって与えられこそすれ、象徴論としての理論的な検討は立ち後れていた。申請者は、言語無き思考として展開される「妄想—分裂態勢」から、言語的思考が支配的となる「抑鬱態勢」への移行の問題として、ピオン、シーガルの象徴論を読み解く。そして、他者による言語的働きかけ、および、父の象徴の導入による象徴的場の構成によって、患者が自らの存在について承認することが可能となっていく、という明快な象徴論を組み立てている。

第6章から第8章では、ラカンによる父性の概念を参考にしつつ、自己自身の存在の象徴化という作業が、エディプス・コンプレックスにおける父の死を経て遂行されるという解釈を下し、治療的に有効な象徴化および象徴形成の本質をここに求め、申請者自身の経験を基にした幼児の遊びの分析においてその象徴形成の過程を辿り、この過程において幼児が世界に向けての「問い」を自己自身の象徴化として発することができるようになることを確認し、さらにこの記述と対比する形で、精神病のシュレーバー症例を取り上げ、この基本となる象徴化の解体として精神病を描き出すことに成功している。

こうして本論文は、フロイトが、象徴を精神分析の基礎理念として据えつつ、広く受け入れられていた神秘主義的、ロマン主義的な象徴概念からは、象徴それ自体の構造を解明することによって脱皮したことを鋭く指摘し、自己自身をいかにして象徴化するかということが人間形成の課題であるという視点を据えて、象徴機能を軸にした治療的方向性をも打ち出している。

以上のように、本学位申請論文は精神分析的な観点から象徴機能が人間の精神形成について有している意義を解明し、この象徴論に基づいて、幼児期の象徴化のあり方から、象徴的世界の解体過程までを一貫して考察することに成功している。論文の各章はすでに学術誌に掲載され高い評価を得ている。以上の点で、本学位申請論文は、人間の全体的現実を環境との関わりに沿って解明することを目指して創設された人間・環境学専攻人間存在基礎論講座の理念に適ったものといえる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成17年1月13日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。